

「教育関係共同利用拠点」への認定について

食資源教育研究センター長 石井 尊生
 海事科学研究科長 林 祐司
 内海域環境教育研究センター長 川井 浩史

「教育関係共同利用拠点」制度は、多様化する社会と学生のニーズに答えつつ、質の高い高等教育を提供していくために、各大学の有する人的・物的資源の共同利用等を推進することで、国公私を通じた多様かつ高度な教育を展開していく大学の取組を支援する制度です。

このたび、以下の3施設が教育関係共同利用拠点に申請し、文部科学大臣より認定されました。

拠点類型	施設名	拠点名	認定期間
農場	大学院農学研究科附属 食資源教育研究センター	農場と食卓をつなぐフィールド教育拠点	平成26年7月31日 ～ 平成31年3月31日
練習船	大学院海事科学研究科附属 練習船深江丸	グローバル海上輸送に関わる海事技術・海洋環境とヒューマンファクタの教育のための共同利用拠点	
臨海・臨湖 実験所	自然科学系先端融合研究環 内海域環境教育研究センター マリンサイト	都市域沿岸の海洋生物・生態系と環境管理に関わる教育共同利用拠点	

《大学院農学研究科附属食資源教育研究センター》

本拠点は、農場から食卓までを実際に学ぶ実習教育を展開することで、農場で農作物が生産され、食物として食卓へ上るまでの過程と、食の安全についての実践的教育の機会を他大学へも提供しようとするものです。この実習では、食資源教育研究センターで生産された農作物を主体とした試食会も予定しており、五感すべてで農、食料、生命、健康、環境を学ぶことを目指しています。

今年度は近畿圏12大学の学生が延べ400人・日以上の実習を受けることになっています。今後、共同利用拠点としての設備を拡充して、より広範囲の利用を目指します。

大学附属農場としては、昨年度までに宇都宮大学、広島大学、東北大学など6大学が共同利用拠点の認定を受けていますが、近畿圏の大学附属農場では初の教育関係共同利用拠点となります。

《大学院海事科学研究科附属練習船深江丸》

深江丸は、大阪湾及び瀬戸内海を主な活動海域とする練習船として、また近畿圏において唯一の「世界につながる海の上の教室」として、瀬戸内海に面する中国、四国、さらには全国の大学等に対して共同利用受け入れの門戸を広げていきます。

今年度は、近畿圏を中心に 16 の大学学部、大学院研究科からの利用受け入れを予定しており、日帰りや 1 泊 2 日の航海で、計 25 日の共同利用の航海を計画しています。

練習船の類型には、深江丸を含めて全国で商船系 2 隻、水産系 6 隻の計 8 隻が認定されており（平成 26 年 7 月 31 日現在）、今回の拠点認定により、深江丸は、教育関係の利用を広く他大学へも開放し、施設としての練習船のより効率的な利用を実現してまいります。

《自然科学系先端融合研究環内海域環境教育研究センターマリンサイト》

神戸大学が立地する大阪湾は、豊かな生物多様性が見られる海域と、活発な経済活動のために様々な環境問題を抱える海域の両方を含んでいます。そこで、本拠点では沿岸域の生物多様性・生態のみならず都市域沿岸に特徴的な環境問題を、生物学・地球科学・環境科学といった幅広い学問分野の視点から総合的に理解し、その管理・改善に向けた取組が可能な高度な人材を育成することを目標に、学内外の学生に対して多様な教育プログラムを提供します。

■ 食資源教育研究センター事務室

ans-centerjim@office.kobe-u.ac.jp ☎ 0790-49-0341

■ 海事科学研究科企画係

gmsc-kikaku@office.kobe-u.ac.jp ☎ 078-431-6211

■ 理学研究科総務係

sci-soumu@office.kobe-u.ac.jp ☎ 078-803-5761



2014/9/19

農学研究科附属食資源教育研究センターの 「教育関係共同利用拠点」への認定について

農学研究科附属食資源教育研究センター
センター長 石井 尊生

教育関係共同利用拠点制度について

《制度の趣旨》

多様化する社会と学生のニーズに応えるべく、各大学において、それぞれの教育理念に基づいて機能別分化を図り、個性化・特色化を進めながら教育研究活動を展開していくことが重要。

質の高い教育を提供していくためには、個々の大学の取組だけでは限界があるため、他大学との連携を強化し、各大学の有する人的・物的資源の共同利用等の有効活用を推進することにより、大学教育全体として多様かつ高度な教育を展開していくことが必要不可欠。

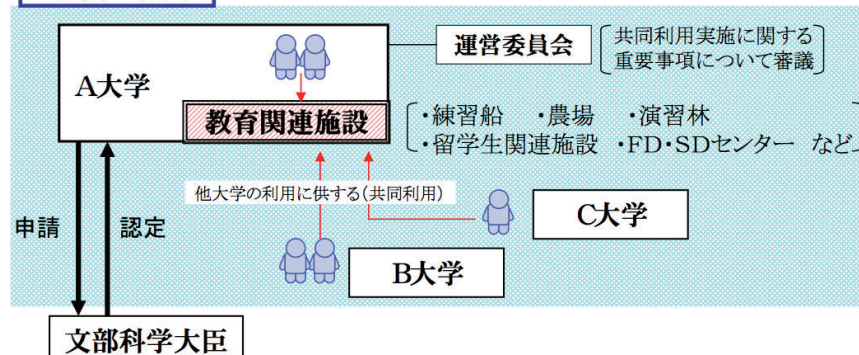
大学の教育関連施設の共同利用の促進を図るための制度を創設し(「教育関係共同利用拠点」。21年9月より施行*)、大学間連携を図る取組を一層推進。

*「学校教育法施行規則(第143条の2)」、「教育関係共同利用拠点の認定等に関する規程」(学術研究分野については、平成20年に「共同利用・共同研究拠点」を既に制度化)

文部科学省ホームページ (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/attach/1287149.htm)

教育関係共同利用拠点制度について

《制度の概要》



【認定基準】

- 大学教育の充実に特に資すると認められるものであること
- 共同利用実施に関する重要事項について審議する委員会を置くこと
- 利用する大学を広く募集するものであること
- 共同利用に必要な設備・資料等を備えていること など

文部科学省ホームページ (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/attach/1287149.htm)

教育関係共同利用拠点制度について

拠点類型

留学生日本語教育センター
大学の教職員の組織的な研修等の実施機関
練習船
演習林等
農場
臨海・臨湖実験所
水産実験所

認定開始は平成22年度より (毎年公募・審査・認定)

認定期間は5年間 (再認定可)

平成26年7月31日現在: 30大学 48施設が認定

平成26年度新規認定8施設 平成27年度再認定10施設

神戸大学における教育関係共同利用拠点 (平成26年度より3施設が新規に認定)

拠点類型	施設名	拠点名	認定期間
農場	大学院農学研究科附属食資源教育研究センター	農場と食卓をつなぐフィールド教育拠点	平成26年7月31日 から 平成31年3月31日
練習船	大学院海事科学研究科附属練習船深江丸	グローバル海上輸送に関わる海事技術・海洋環境とヒューマンファクタの教育のための共同利用拠点	
臨海・臨湖実験所	自然科学系先端融合研究環内海域環境教育研究センターマリンサイト	都市域沿岸の海洋生物・生態系と環境管理に関わる教育共同利用拠点	

教育関係共同利用拠点認定施設(農場)

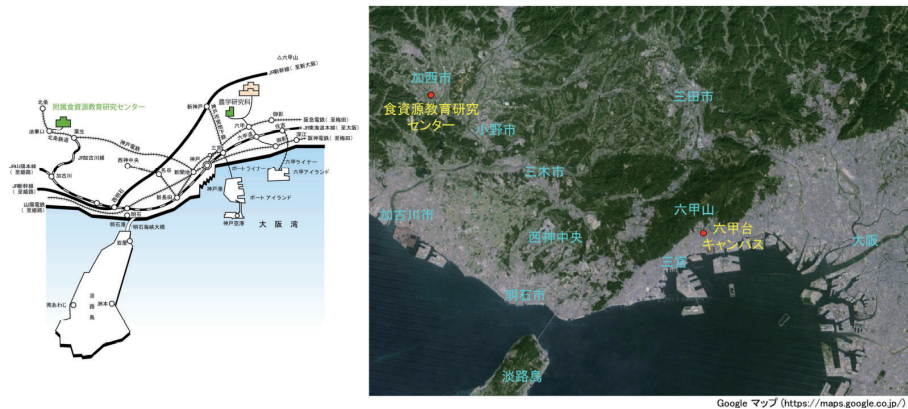
大学名	施設名	拠点名	認定期間
東北大学	川渡フィールドセンター	食と環境のつながりを学ぶ複合生態フィールド教育拠点	平成23-27年
宇都宮大学	農学部附属農場	首都圏における食・生命・環境の複合型フィールド教育共同利用拠点	平成22-26年 平成27-31年
信州大学	農学部附属アルプス圏フィールド科学教育研究センター 野辺山農場	中部高冷地域における農業教育共同利用拠点-高冷地野菜と畜産を組み合わせたフィールド教育-	平成25-29年
静岡大学	静岡大学農学部附属地域フィールド科学教育研究センター 持続型農業生態系部門(農場)	東海地域における暖地型農業実践教育共同利用拠点-茶・ミカン・トマトによる習熟度対応型フィールド教育-	平成24-28年
神戸大学	大学院農学研究科附属食資源教育研究センター	農場と食卓をつなぐフィールド教育拠点	平成26-30年
広島大学	瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター西条ステーション	食料の生産環境と食の安全に配慮した循環型酪農教育拠点	平成22-26年 平成27-31年
宮崎大学	農学部附属フィールド科学教育研究センター・住吉フィールド	九州畜産地域における産業動物教育拠点	平成25-29年

食資源教育研究センター

設立: 2003年

前身は昭和42年に発足した神戸大学農学部附属農場

場所: 兵庫県加西市鶉野町



食資源教育研究センター

教員 9 名 (教授 4 名、准教授 2 名、助教 3 名)

技術員 13 名 (作物系 4 名、果樹系 4 名、畜産系 5 名)

事務員 5 名 (室長・係長・係員 各 1 名、非常勤 2 名)

面積: 40 ha (甲子園球場 10 個分)

学生宿泊施設: 最大52名の宿泊が可能

農産物の生産活動を通して、主に神戸大学農学部の学生に対して、教育・研究を行っている



学生の農業生産物に対する理解

近畿圏の学生（神戸大学生を含む）

大阪、神戸、京都等の都市部出身

農作物をほとんど知らないし、育てたことがない

近畿・中国・四国地方等の郊外出身

農作物が育っているのを見たことがある

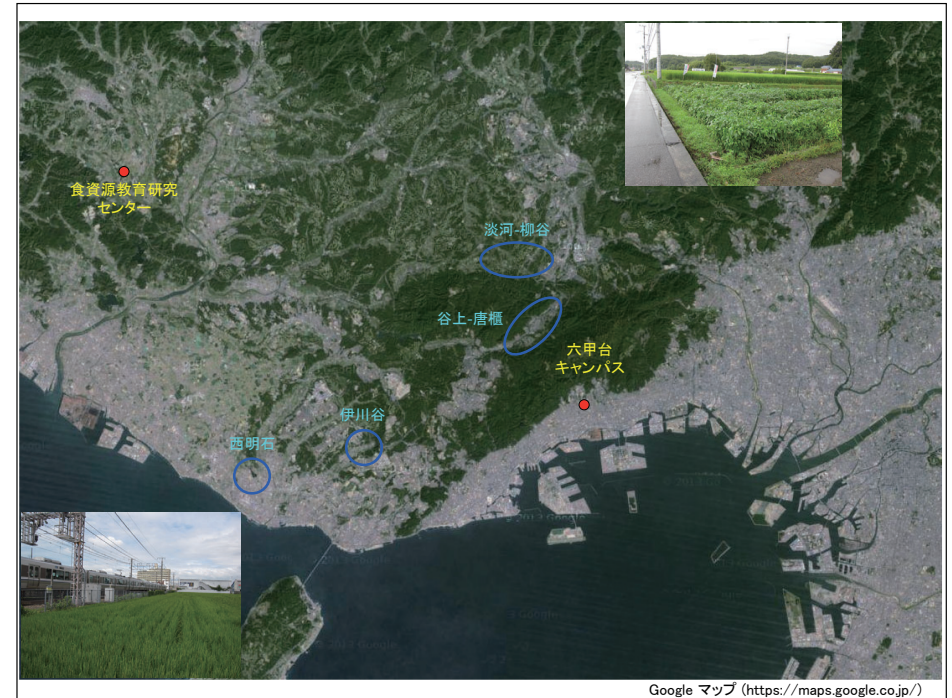
親族に農家がいると農作物の生産に詳しい

畜産物（肉類）の調整については、知る機会が全くない

残酷、かわいそうというイメージのまま

テレビや写真等で農産物の生産過程を見ることは可能

五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）を使うことが必要



Google マップ (<https://maps.google.co.jp/>)

食に関係する仕事に就く学生に必要な教育

農作物の生産

作物が効率よく光合成を行い、炭水化物をたくさん蓄えることができる丈夫な植物体を作る仕組みを知る

ただし、最初（種蒔きなど）から最後（収穫など）まで、人間が作物の面倒を見ないといけない

畜産物の生産

安定した生産と高品質につながる家畜の管理の重要性を知る

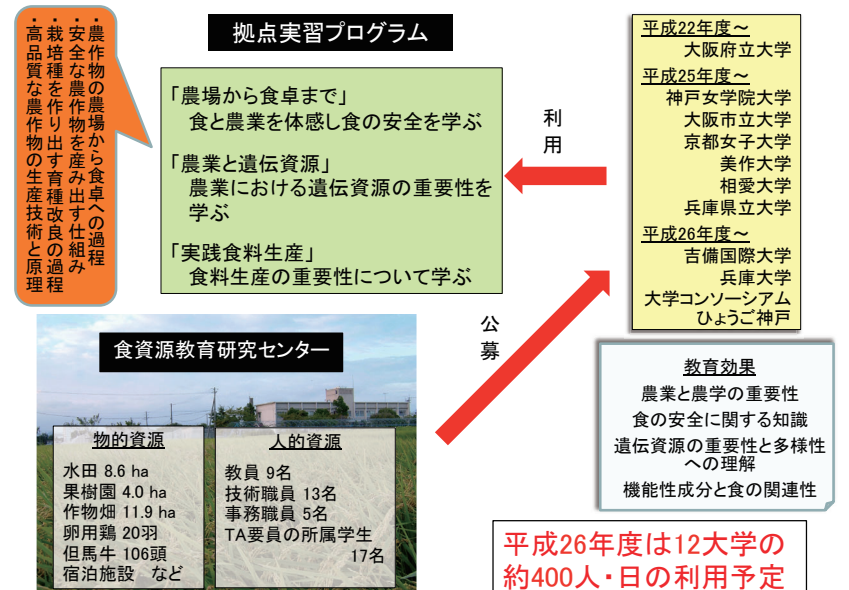
肉類を調整する際には、家畜は人間に殺されることを直視し、命の大切さを知る

農作物と畜産物の流通・消費

農業における生産活動は自分が食べるのではなく、ほかの人に提供することを目的としていることを知る

単なる農作業体験ではなく、消費者を意識した生産活動の大切さを知る

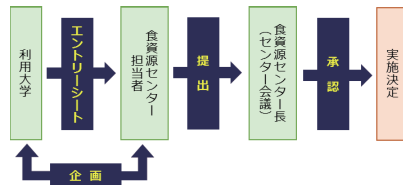
農場と食卓をつなぐフィールド教育拠点



拠点利用の公募について

利用大学の希望に沿ったカスタムメイドのフィールド演習

前年の11月までにセンターのウェブサイトからダウンロードできるエントリーシートに必要事項を記入してセンターの担当者に提出。打ち合わせ後、それぞれの大学用の演習を作成。提出期限後であっても、調整可能であれば随時受けつける。なお、公募案内は全国の52大学に対して郵送・連絡を行っている。



利用大学を特定しないレディメイドのフィールド演習

毎年9月に2泊3日の「農場と食卓をつなぐフィールド演習」を予定

この演習は、神戸大学農学部1年生の配当科目であるとともに、大学コンソーシアムひょうご神戸の単位互換科目でもあるので、単位互換協定参加大学(28大学)の学生はコンソーシアムを通して履修可能。コンソーシアムに関係なく、少人数での参加を希望する大学はセンターのウェブサイトを通して申し込む。



食資源教育研究センターホームページ (<http://www.edu.kobe-u.ac.jp/ans-foodres/>)

平成26年度の他大学利用の農場実習の例

大阪市立大学 生活科学部 16名(5/24), 10名(9/4-5)

- 5月24日(土) 水稲田植え, ナシの袋掛け
- 9月4日(木) **ブドウの収穫・調製, 試食会**
- 9月5日(金) ウシの飼育管理, イネの収穫

農場と食卓をつなぐフィールド演習 28名(神大4名, 他大学 計5大学24名)

- 9月1日(月) ウシの飼育管理, 鼻紋採取
- 9月2日(火) ニワトリの飼育管理, 卵の鮮度測定, **ナシの収穫・調製 試食会**
- 9月3日(水) コメの品種説明, 農薬と食の安全, キャベツの定植

神戸女学院大学 人間科学部 16名

- 9月11日(木) **ナシの収穫・調製**
- 9月12日(金) キャベツの追肥, ハクサイの定植, ナスの収穫, イネの収穫, 農薬と食の安全, **試食会**
- 9月13日(土) ウシの飼育管理, 鼻紋採取

大阪府立大学 獣医学類・応用生命科学類 19名

- 9月16日(月) ウシの基本
- 9月17日(火) 除角・鼻環・去勢, 農作業機械-基礎・耕耘
- 9月18日(水) ウシの体測定, 飼料作物と里山散策

本年度の拠点利用の予定について

平成26年度は12大学、約400人・日の利用を予定

- 兵庫県: 神戸女学院大学、兵庫県立大学、兵庫大学、吉備国際大学、神戸松蔭女子学院大学、関西国際大学、神戸親和女子大学
- 大阪府: 大阪府立大学、大阪市立大学、相愛大学
- 京都府: 京都女子大学
- 岡山県: 美作大学

拠点利用に係る経費について

本学の学生とほぼ同等

- 実習の実施に係る費用: 徴収しない
- 移動費: なし
- 食資源センター往復に必要なバスのチャーター費用は学内予算(平成26年度)と特別経費(教育関係共同実施分:平成27年度以降)で措置
- 宿泊を伴う場合
 - 学生宿泊施設使用料: 1泊につき600円/人
 - シーツ類のクリーニング費用: 1,000円/人(宿泊数に関わらない)
 - 食費: 実費(学生宿泊施設での自炊の他、弁当の手配も可能)